

父母の校則問題に関する意識

神 田 嘉 延

(1989年10月16日 受理)

Consciousness of a Parents on the School Code

Yoshinobu KANDA

目次

序

- (1) 父母の階層別の校則についての意識
- (2) 制服問題に対する父母の意識
- (3) 学校外生活の校則に対する父母の意識
- (4) 校則問題の調査に対する学生の意識

序

本報告は鹿児島県内の父母の校則に対する意識の実態を明らかにするものである。校則は学校内における子供の生活ばかりでなく、帰宅後の家庭生活、地域生活までにもおよび、学校、家庭、地域の三者連携論が校則によって展開している一面をもっている。校則依存の生徒・生徒指導の問題は学校内のことばかりでなく、家庭、地域の子供の生活の問題にもなっている。青少年の「非行」問題の原因は学校教育の問題ばかりでなく、地域、家庭、マスコミ等の複雑な絡み合いのなかで、子供の人格の崩れが起きており、生徒指導・生活指導の問題は学校内だけの子供の生活をみつめているだけでは問題の克服をはかれないことはいうまでもない。しかし、生徒指導・生活指導は規則によって、子供の全生活を管理していく問題ではなく、問題をおこした子供についての個別的な指導が基本である。そこでは、個々の子供について、具体的な問題状況を明らかにしての指導が求められているのである。学校教育に問題の原因がある場合もあるし、家庭に問題がある場合もあるし、地域に問題がある場合もあるし、その指導はきわめて個別なことである。また、子供の生活の問題状況に対して学校が果たすべき役割は何か、子供の家庭生活のどこまで学校が介入することができるか等、現代の学校教育の果たすべき課題の問題がそこには含まれている。

本研究で問題にする「校則問題に対する父母の意識」を明らかにしていく視点は、父母が現在の学校の生徒指導・生活指導等子供の生活に対して、学校にどのような期待・役割をもっているのか

を明らかにすることを目的としている。つまり、子供の様々な発達の側面に対しての学校依存の意識状況を校則問題から探ることである。親は親権者として、子供の成長にどのような役割・責任をもっているのかという意識を校則問題を媒介として明らかにしていくてがかりにしたい。

1. 調査の対象と方法

調査対象は、鹿児島県内の小学生を持つ親75名、中学生をもつ親143名、高校生をもつ親95名、合計313名である。調査は鹿児島大学教育学部の学生の面接調査によって、1988年11月－12月に実施した。

調査項目 1. 学校での制服の規定の有無とその賛否、理由。2. 帰宅後の制服規定の有無とその賛否、理由。3. 服装・身なりの学校の規則についての賛否。4. 遊戯場等への出入りに対する学校のきまりの有無とその賛否、理由。5. 学校生活以外の家庭等での学校による生活点検指導の有無とその賛否、理由。6. 校則見直しについての意見とその理由。7. 校則問題について親が子供と話し合っていることの有無、その内容と親子の意見のずれの状況。8. 学校の生徒指導についての意見とその理由。9. 親が子供に気を配っている内容。10. 子供の進路希望と親自身の子供に対する将来の期待。11. 現在の学校に対する意見。以上11項目について、アンケート形式について選択してもらうことと、それに対する意見や理由をフリーにのべてもらうことで調査を実施した。この調査について学生自身の感想も同時に提出してもらった。調査のねらいはアンケートの回答によって統計的に親の校則に対する意識を分析することではなく、学生に自由に校則についての意見を親がのべたことの内容とそれに対する学生の感想の分析にある。学生は道德教育の授業の受講生であるが、調査の不十分なものについては削除した。

調査の対象は鹿児島市を中心にして、学生の調査可能の条件によって抽出したため社会調査の統計的抽出方法からみるならば問題があり、したがって、この調査結果は鹿児島県内における父母の校則に対する意識として一般性を持つデータではない。校則に対する親の意識の類型によって、具体的に親がどのような意見をもっているかをみるためのものである。

2. 調査対象者の属性

調査対象者の男女別は、男49名、女264名である。

調査対象の居住地の市町村別の区分は、鹿児島市239名、鹿児島市以外の市26名、町村43名、不明5名であり、鹿児島市に調査対象者が偏っている。

年齢差は30代96名、40代184名、50代30名、無回答3名であり、調査対象者は40代の親が最も多く、次が30代となっている。

調査対象の家庭の生計を担っている職業は、農林14名、公務・農協66名、肉体労働23名、事務労働109名、専門労働33名、商工自営46名、その他2名、無回答10名であり、事務労働者が最も多い調査対象になっている。次は公務・農協職員である。

調査対象者自身の職業は、専業主婦140名、常雇68名、自営35名、パート33名、内職5名、無回答32名であり、調査の不徹底から職業の無回答が多数あった。これは、すでに、前記の家庭の主たる生計を担っている職業との区別が調査者自身の理解不足から起きたものである。

P T Aの役員を現在していると答えたものは、45名であり、全体の回答者の14%程度である。さらに、町内会の役員をしているものは28名と全体の回答者の9%足らずである。

(1) 父母の階層別の校則についての意識

1. 校則の現状についての父母の意識

校則について父母は、全体的に現状をどのように考えているか。現状の校則でよいという回答は、約半数の親51.4%である。そして、大いに見直すべきであるという回答の親12.1%であり、やや見直すべきであるという親は26.8%と見直しを希望する親が全体の38.9%と約4割を占めている。ところで、校則を現状についてよいと答えた親がその理由については明解な答えをだしているのは32.9%と約3分の1の親が理由をのべているにすぎない。これとは逆に、大いに見直すべきだと答えた親は、その理由を明解にのべているのが78.9%と実に8割近くの親がその理由をのべている。また、やや見直すべきであると答えた親も理由をのべているのは60.7%と6割の親が見直すべき理由の態度をはっきりさせているのである。つまり、現状を肯定する親はその理由の態度が不明確であり、見直すべきであるという親は、その理由が明らかであるのが特徴的である。

校則の見直しについて男女差はそれほど大きくみられない。現状肯定の意見は父親53.1%に対して母親51.4%である。また、見直すべきという意見は父親40.8%に対して母親38.6%である。態度を保留していることについては、
父親6.1%，母親10.0%であり、
態度保留はやや母親に多く出ている。

ところで、年齢差については、
30代の親に現状肯定意見が他の
年齢層に比してやや多く出ている。また、わからないという意見も同様に30代の層が他の年齢層に比して高く出ている。見直すべきであるという意見は年齢の高い層が高く出ている。しかし、50代についてはやや見直すべきであるという意見が多く、大いに見直すべきであるという、見直しに対する強い意見の比率は他の年齢層に比して強くない。

表1 校則について現状をどのように考えているか

				%	
現状でよい	大いに見直す べきである	やや見直す べきである	わからない	無回答	
161名 51.4%	38名 12.1%	84名 26.8%	16名 5.1%	14名 4.5%	

表2 校則見直しについての理由の有無

	%	
	理由あり	理由わからない
現状でよい	32.9	67.1
大いに見直すべき	78.9	22.1
やや見直すべき	60.7	39.3
わからない	37.5	62.5
計	45.3	54.7

年齢的な意見の相違は、子供がどの段階の学校に属しているかということに関係があるとみられる。小学生の子供のいる親は、校則に対して現状肯定の意見が強い。これは、小学校の校則が中学校や高校に比べて厳しくないためである。小学生をもつ親は現状の校則肯定が60.9%と約6割が現状の校則でよいとしている。また、無回答8.7%、わからない7.2%と態度を明確にしない親が15.9%と6分の1にあがっている。小学生をもつ親の校則見直しの意見は23.1%と約4分の1足らずである。しか

し、中学生をもつ親になると校則の現状肯定の意見は大幅に落ち、43.4%と半数を割っており、見直しの意見が48.3%と肯定よりも上回っている。高校になると見直しの意見は、33.8%と約3分の1になっていっている。中学生をもつ親の校則見直しの意見が強いのは、中学校教育における校則依存が極めて厳しい現状のためであると思われる。

市町村別における校則見直しの意見は町村の地域が校則の現状肯定が強く出ている。また、無回答とわからないという回答が14.0%と他の地域に比して態度保留が強く出ている。校則の見直しの意見をもつ親は25.6%と約4分の1となっており、見直しの意見は町村の地域では高く出ていない。調査対象者からの子供の通っている学校の校則、生活点検等の学校外の生活指導の厳しさは町村は鹿児島市に比して強くない。

例えば、帰宅後の外出するときの制服の義務づけについては、鹿児島市は義務づけて指導していると答えた親は65.3%に対して町村では、46.5%と低くなっている。帰宅後の外出の校則はあるが実際は指導していないと答えた親は鹿児島市15.9%、町村27.9%である。さらに、学校では帰宅後の校則を定めていないと答えた親は鹿児島市18%、町村25.6%である。親にとって帰宅後の校則があるが実際指導していないということと、学校に帰宅後の外出の校則そのものがないということでは区別がつかないということであり、みえてくるのは、帰宅後の外出の制服の着用を厳しく取り締まっていることである。

生活点検等の指導を行っているのは、鹿児島市が実施していると答えた親が59.4%、町村が48.8%である。以上のように鹿児島市と町村の学校に子供を通わせている親の学校の校則の厳しさは違うようである。

ところで、PTAの役員の有無による校則見直しの意識では、役員を現在やっている層は現状の

表3 年齢層別の校則見直しの意識

	現状で よい	大いに 見直し	やや 見直し	わから ない	無回答	計
30代	54.6	12.4	19.6	7.2	6.2	100.0
40代	50.5	13.0	27.7	4.3	4.3	100.0
50代	50.0	6.7	40.0	3.3	0.0	100.0

表4 小学校、中学校、高校別の校則見直しに対する意識

	現状で よい	大いに 見直し	やや 見直し	わから ない	無回答	計
小学	60.9	10.1	13.0	7.2	8.7	100.0
中学	43.4	15.4	32.9	4.9	3.5	100.0
高校	58.9	9.5	26.3	3.2	2.1	100.0

校則でよいと答えるのが62.2%と6割強の現状肯定の意見である。これに対してPTAの役員をしていない層は、現状でよいと答えているものが49.6%である。町内会の役員層も同様であり、現在役員をしている層は、校則にたいして肯定的であり、現状でよいとするものが67.9%とPTAの役員層よりも現状の校則肯定の意見が強い。

回答者自身の職業の有無の違いによつての校則の見直しの意見は、専業主婦層が、現状でよい51.4%、大いに見直し9.9%、やや見直し31.2%ということで、見直しの意見が約4割近くを占めている。常雇層では、現状でよい48.5%、大いに見直し20.6%、やや見直し19.1%と見直しの意見が約4割を占めているが、専業主婦と異なって大いに見直すべきという積極的な見直しの意見の比率が他の層にくらべて高くでている。自営層では、校則の現状肯定の意見が60.5%と見直しの意見は、25.7%と約4分の1にすぎないのである。親の職業の違いによって、子供の学校の校則問題に対する見方も異なるのも大きな特徴である。

農業を主たる生計源とする家庭では、校則に対して、現状肯定の意見が86.7%と最も高い。肉体的労働者も65.2%と現状の校則に対して肯定的意見が強い。これとは逆に公務・農協勤務で生計をたてる親は、37.9%の校則の見直しの意見を持ち、教師、医師、技術者等の専門的職業で生計をたてる親になれば、60.2%が校則の見直しの意見をもつのである。専門的職業の親は、校則が現状でよいと答えたものは、33.3%と3分の1にすぎないのである。専門的職業従事の場合が子供の学校の校則について強い危惧の思いをし

表5 鹿児島市、鹿児島市以外市、町村別の校則見直しの意識 %

	現状でよい	大いに見直し	やや見直し	わからない	無回答	計
鹿児島市	50.2	11.3	30.1	5.0	3.3	100.0
上記外市	50.0	19.2	19.2	3.8	7.7	100.0
町村	60.5	14.0	11.6	4.7	9.3	100.0

表6 PTAの役員の有無による校則見直し意識 %

	現状でよい	大いに見直す	やや見直す	わからない	無回答	計
なし	49.6	12.3	28.4	5.2	4.5	100.0
あり	62.2	11.1	17.8	4.4	4.4	100.0

表7 町内会の役員の有無による校則見直し意識 %

	現状でよい	大いに見直す	やや見直す	わからない	無回答	計
なし	49.8	11.9	27.7	5.6	4.9	100.
あり	67.9	14.3	17.9	0.0	0.0	100.0

表8 雇用形態別の校則見直しの意識 %

	現状でよい	大いに見直し	やや見直し	わからない	無回答	計
専業主婦	51.4	9.9	31.2	3.5	4.3	100.0
常雇	48.5	20.6	19.1	8.8	2.9	100.0
自営	62.9	5.7	17.1	8.6	5.7	100.0
パート	54.5	9.1	18.2	6.1	12.1	100.0

ているのである。

表9 職業別の校則見直し意識

2. 教師を職業とする親の校則意識

専門的職業従事の中で教師を職業とするものが22名調査対象者になっている。この22名の教師を主たる生計源としている親の校則問題に対する意見は、多くが校則を見直すべきであるという答えをしている。現状の校則でよいと答えたものは6名、

大いに見直すべきである6名、やや見直すべきである10名ということである。つまり、家庭では、我が子の教育という立場からみるならば現在の校則はよくないと思っているのである。

教師の22名について、現状の校則の意見ごとのその具体的理由をのべ、教師としての学校での校則問題と親としての校則問題についてその自己矛盾の問題について述べていくことにする。

現状の校則でよいと答えた6名の教師は5名が中学生をもつ親であり、1名が小学校5年生の子供をもつ親である。現状でよいとした理由は、次に述べるとおりである。「子供が窮屈に考えていないので」「現在の校則はそれほど厳しいものとは思わない」「集団生活に関するルールは必要なため」「服装は人を表わすということで、学生は学生らしくするために制服は大いに必要である」「標準服・制服は、友達同志の仲間意識、対等平等意識が作られ、個性の磨きあいが望めるので」という意見である。教師のなかでは意見が少数であった現状の校則肯定は、現状の校則に教育的価値を見出ししている。校則肯定派の教師の家庭では、自分の子供について現在気をつけていることは、「高校受験にむけて勉強のこと」「人格形成と学力の関係、大学まで進ませたいので」「大学まで進学をしてもらいたい。最後までやり遂げるように子供に注意している」「部活動のやりすぎで勉強のほうがおろそかになりがちで、健康面に気をつけて勉強の自覚を促したい」と語っている。

やや見直すべきであるという意見をもった親10名は、小学生をもつ親2名、中学生をもつ親4名、高校生をもつ親4名であるが、小学生をもつ親の場合は、「親同伴ならゲームセンター等の遊戯場の入場を許可してもいいのではないか」「基本的な生活習慣の指導は親と連絡して指導すべきであり、あまり細かな生活点検等の指導による干渉はこまる」「ある程度のきまりは必要であるが、こまかな遊戯場等の入場の禁止のきまりは子供にとって窮屈である」と答えている。小学生をもつ親の場合、遊戯場などの入場禁止に強い関心をもっている。また、生活点検等の指導は家庭にまかすべきとしている。一人の親は将来の希望として、「大学や大企業の研究員のような仕事についてもらいたい」としている。子供に日常的に気をつけていることは「整理整頓である」とする。

やや見直すべきとした中学生をもつ親の意見は、「校則がこまかすぎる」「髪型とか靴下の三つおりとか余りこまか過ぎる点があり、のびのびとした発想を失うおそれがある」「子供自身が自主的

	現状で よい	大いに見 直す	やや 見直す	わから ない	無回答	計
農林業	86.6	0.0	0.0	6.7	6.7	100.0
公務農協	47.0	21.2	16.7	7.6	7.6	100.0
肉体労働	65.3	4.3	30.4	0.0	0.0	100.0
事務労働	53.2	7.3	33.9	2.8	2.8	100.0
専門職	33.3	24.2	36.4	3.0	3.0	100.0
商工自営	52.2	10.9	26.1	8.7	2.2	100.0

に努力すべきことなどがあるので、やや見直すべき校則がある」「学校の生活点検の指導において、きまりとして守らせるのではなく、基本的な生活習慣を身につけるということで親が幼少のころからしっかり躾るべきである」「校外生活は親の責任範囲になるので、生活点検等の躾は親にまかせてほしい。しかし、親が責任を果たしていない場合は教師は家庭に干渉しなければならない」とのべる。ここでは、校則がこまかすぎるという意見が強くでている。そして、子供の自主性をもたせた生活指導が必要であるとする。また、学校以外の生活については、親が責任をもつべきであり、学校は家庭生活に干渉すべきではないとしている。しかし、教師としては、家庭が子供の生活指導、躾の責任を果たしていない場合は教師は家庭に干渉しなければならないと考える。ここには、教師としての責任と一般的な親としての立場との側面が表われている。

子供の将来については、「本人の意志を尊重したいが、大学まで進学してほしい」「親は少し高望みがちですが、せめて自分達よりも良い生活ができる将来をと考えていたが、子供には能力がないようであり、親の希望をおしつけず自分のやりたいことをさせたいと思うようになった。」「学歴にはとくにこだわらない。公務員になってもらいたいのが本人の希望を100%生かすような方向で考えている」とのべる。

やや見直すべきであるとした高校生をもつ教師の家庭の親の意見は、「ズボンの裾幅とか靴下のワンポイント等必要以上に細かすぎる」「高校生にはこまかな校則は必要ない」「遊戯場等の禁止のきまりはほとんど守られていないようであるので、最低限のきまりでいいのではないか」「生活点検等の指導は子供がしめつけられているようであるが、指導がなければ生活態度が乱れるのではないか、こまかいところの校則はもう少し見直してほしい」「社会状況の変化により、生徒の意見も取り入れて校則の見直しをすべきである」「遊戯場の入場の禁止の規則は、社会常識で不適当と考える以外は、本人の自覚にまかせていいのではないか」と述べる。校則にやや見直すべきとした高校生をもつ親の場合、高校生段階の子供の成長にあわせた生活指導を求めている。本人の自覚を尊重したことや子供自身の意見を取り入れての校則見直しの意見をもっている。しかし、大学受験のため高校は重要な時期ということから、もしも生活態度が乱れたら将来の影響が大きいということで学校の生活点検を望む面もあり、個々に矛盾していることもある。

高校生をもつ教師の家庭の親は、子供の現在に気をくばっていることが学習面のことが強くでている。「学習面において大いに頑張ってもらいたい。大学程度の専門的な知識、技能を身につけそれが生かされるような職業についてほしい」「勉強のことに現在気をくばっている。親はとくに希望していないが、子供のいききたいところにいかせるが、できれば私立より国立の大学に進学してほしい」「進路のことに気をくばっている。本人の希望にむけて親として援助と助言をしたい」「友人関係に気をくばっている。大学進学は親も本人も一致している」と述べる。

ところで、現在の校則について大いに見直すべきであると答えた教師の親は6名いたが、それぞれ小学生をもつ親2名、中学生をもつ親2名、高校生をもつ親2名である。小学生をもつ親は、「服装等自由でよい」「生活点検等の指導など教師は家庭に干渉すべきではない。親が責任をもつ」

「校則が一方的すぎる」と述べる。

中学生をもつ教師の家庭の親の意見は「校則は必要かもしれないが現在の校則はあまりにもこまかすぎる」「生活点検等の指導は親の意見を中心にすべきである」「学校の先生は子供を指導する際、子供の考えや気持ちを理解してやってほしい。押えつけの指導はあまり好まない」と答える。子供のことで気を配っていることは、「しつけのこと」「友達関係のこと」と述べ、将来のことでは、「子供の考えに親はアドバイスをし、協力して希望をかなえてやりたいと思っている」と強調する。

高校生をもつ教師の家庭の親の意見は、「校則は子供にとって窮屈であるようだ」「遊戯場の禁止のきまりはなくし、子供の判断にまかせ、自由にすべきである」「現在の校則は子供の人権を認めていない」「生活点検等の指導は家庭にまかすべきであり、社会人としておかしいときのみ注意すべきである」と答える。これらの意見は現在の学校のきまりについて強い危惧の思いをもつ教師の親達である。これらの教師達が実際の学校運営のなかでいかなる位置にあり、学校ではどのような役割を果たしているのであろうか。学校においては、教師の立場から校則を守らせるように指導し、親として、我が子のことを考えれば、現状の校則には大いに問題を感じているのである。

現状の校則をよいとして肯定する教師の家庭の親は、子供の進学について熱心であり、学歴を大学まで強く求めていることが特徴的である。子供の現在の生活においてとくに気を配っていることに学習、学力、勉強の問題がでてきているのであった。これに対して、校則を見直していこうという教師の家庭の親は子供の希望、子供の考えに親はアドバイスと子供の意志を尊重しての傾向が強いのであった。

3. 教師以外の職業をもつ親の校則見直し意識

教師以外の専門職従事者で生計をたてている調査対象者として、医師が4名いたが、2名が現状の校則でよいと答え、大いに見直すべきである1名、やや見直すべき1名である。大いに見直すべきと答えた医師は、学校の制服のきまりも反対であり、制服の強制は個性を失う教育であるとしている。そして、「きまりによっての一律化は軍隊と同じであり、個性を重視という視点から現在の校則は大いに見直すべきである」としている。この医師の場合の子育て観は、「いまの時間を子供が楽しんでいるということで気を配っている」ということである。子供の将来については、自分の可能性を追いつづけられるように考えている。学校に望むことは「あるひとつの質問にたいして10人が10人とも同じ解答を期待する教育ではなく、10人が10人とも異なった解答をだし、それぞれを評価する教育が必要ではないか」と述べる。現在の校則について、やや見直すべきとした医師は、「学校は充分すぎるくらい家庭の責任のところまで指導してくれている。生活点検等の指導は本来家庭の責任である。学校にそのような指導をまかせるのは親の責任放棄である。学校が家庭のところまで過剰に入ってくるのは、学校に多くの親が生活点検等の教育を求めるためであり、学校は親からの責任を迫られることの回避のため指導をしている。」と述べる。この医師は子供になるべく様々な経験をさせるように努力している。

専門職について、校則見直しの意見が多かった公務員・農協職員の場合は大いに校則を見直すべきという意見が21.2%とやや見直しの16.7%より多く、見直しの場合でも積極的に、その問題点を明確にしているのである。見直すべきであるということの理由を次のようにのべる。「親の側からみてこれぐらいは良いだろうと思う様な事でもこまかすぎる校則にはうんざりする」「きまりは最少限にして子供達の体験からルールを自分たちできめさせていくことが自主性につらなる教育である」「現在の校則は自己判断力をなくすから」「校則は子供の自立を妨げる」「校則がこまかすぎるのは生徒指導の自信のなさではないか」「一部の生徒の違反に過度になりすぎ、一般の生徒のあたりまえの生活がゆがめられる」「かばん、靴、制服等の学校指定であると転校のとき困る」「必要以上にこまかい校則にしばりすぎているようである」「あまりに厳しすぎて子供達がかえって反発するのではないか」「学校外の校則は除外すべきである」「あまりに校則が厳しすぎると人間を小さくしていく」「常識をきまりにしてしまうとかえって子供から反発をうけて、かえって正しい判断力を失うことになる。失敗し、恥をかいて大人になっていくものである。周囲の大人とゆっくり話す時間が少なく校則しか子供の教育がないのかと思うと悲しくなる」というように、多くの校則見直しの理由をのべているが、これらの親は、規則に依存しない教育を望み、子供の個性、自主性の教育の必要性を強調している。さらに、現実のこまかすぎる校則を早急に見直すべきであるという要求をもっているのである。

さらに、専門職、公務員以外の職業に生計をたてる親達も校則見直しの意見を数多くもっているが、校則の現状維持の意見が5割以上とそれぞれ超えており、校則を大いに見直すという積極的改善の意見は専門職と公務員に比べると少なくなっている。今まで、でてこなかった校則見直しの理由を述べれば次のとおりである。「校則を守らせるために、暴力、おどしともみうけられる教師の野蛮な指導があり、そのようなことはやめてもらいたい」（自営業・中学生をもつ親）「女子の髪型についてうるさい。もう少しかわいらしい髪型もゆるしてほしい」（自営・中学生をもつ親）「義務と自由について教師がもっと子供に理解させるべきである」（自営・中学生をもつ親）「校則そのものに疑問がある。団体生活重視のため自由な発想と自主性を育てる教育がない」（事務労働・高校生をもつ親）「きまりだから守らなければならないという感覚でしかものをみない子供に現在の校則依存の教育はなっている」（事務労働・中学生をもつ親）「衣替えの季節をもう少し自由にしてほしい。例えば、暑い日が続く時いつまでも冬服の子供たちはかわいそう」（事務労働・中学生をもつ親）「衣替えなど子供の体調や気候等によってそれぞれ異なるのに一斉に暦にあわせて実施することなど子供の人権を無視した校則である」（事務労働・中学生をもつ親）「生徒手帳の校則を読んだときあまりにもこまかすぎて滑稽で笑ってしまった。中学生の年齢なのだから重要なことだけきめて、後は個々で考えて行動できるように指導すべきである」（事務労働・中学生をもつ親）「こまかい校則を守らせるように子供達を減点法で処理しているのは、人間あつかいしていないことである」（事務労働・中学生をもつ親）「時代の流れも少し考慮してほしい」（自営業・高校生をもつ親）

4. 校則の現状を肯定する親の意識

ところで、校則を現状でよいと答えた親の理由は、次に示すとおりである。「あまりきびしいわけでもなく不満があるようにみえないから」(農業・高校生をもつ親)「ある程度のきまりがなければ教師は指導できないのではないか。いろいろな意見があるが現状ではいまの校則でよい」(農業・高校生をもつ親・PTAの役員)「現在の子供は学力はすばらしいかもしれないが、生活していくうえでのかまりを身につけていない。校則は必要である」(自営業・小学生をもつ親)「先生方が一生懸命過ぎるくらい校則を守る指導をしてくれる。ありがたいことである」(自営業・高校生をもつ親)「きまりがあるからこそ子供は何かをするのにも大変勉強になる。学校での校則は守らなければいけないからこそ校則というもので、それを守れない人は学校にいかねばよいのではないか。現在の学校の校則は賛成」(無職・小学生をもつ親)「きまりは必要である。先生の言うことの方が親よりききめがある。高校生となれば自分自身で校則が現状でよいことはわかる」(自営業・高校生をもつ親)「校則を常識的なことと考え特に意識したことがないので、現状でよい」(事務労働者・小学生をもつ親)「校則を守るのは当然」(事務労働者・高校生をもつ親)「不安定なこの時期であるからこそ校則は必要である」(事務労働者・中学生をもつ親・PTA役員)「集団が生活するためにはある程度のかまりをつくることはやむをえない」(事務労働者・高校生をもつ親)「特に子供にとって大変な校則があるわけではないので現状の校則でよい」(事務労働者・中学生をもつ親)「子供が受け入れているので。しかし、私としては髪型の規制が強すぎるのだと思う。ピンではさんだり、リボンで結ぶくらいはよいのでは」(事務労働者・中学生をもつ親)「きまりがあることは子供にとって大切なこと」(公務員・中学生をもつ親)「きまりによって世の中のしきたりをわからせる必要がある」(公務員・中学生をもつ親)「今の子供は校則がなければ学校と家庭の生活の判断ができないのではないか。一生の間中学3年間位は意識して校則を守る生活があっているのではないか」(公務員・中学生をもつ親)「中学の年齢は集団をくみやすいのできちんとした規則が必要と思う。家では学校で定められた規則はきちんと守るように言っている」(公務員・中学生をもつ親)「子供が別に不満を訴えていないので現状の校則でよい」(公務員・中学生をもつ親)「校則は必要である。校則見直しの世論はマスコミに踊らされていることである」(公務員・中学生をもつ親)「精神的に不安定な時期であるため規則は厳しく正しい方向に導くべきである」(公務員・中学生をもつ親・PTA役員)。

校則が現状でよいとする親の場合、その理由を具体的に述べないのが多い。どのようなことでも校則が現状でよいとして、その理由を述べたのは、現状でよいと考える親全体の約3分の1にすぎない。つまり、積極的に現状の校則に教育的意味をみいだし賛成というよりも子供が受け入れているから、校則が学校にあるのは当然という意識から具体的に賛成の理由をのべないのが多い。教育的に校則をみいだそうとする親は中学生、高校生の難しい時期はむしろ厳しく規則をつくって教師に指導を求める。ある程度のかまりがなければ教師の指導はなりたたないと思う親も少なくない。親は自分よりも学校の教師の方が注意するのにききめがあると考え、教師にたいする生活指導の期

待も強い。厳しい校則による生活指導に親が大変感謝していることもみられる。

これは、中学生、高校生の時期に親がなかなか子供を指導・助言できないことによるものであり、学校依存への傾向を一層強めているのである。

5. 親子の校則問題の話し合いの有無による見直し意識

ところで、親子の校則問題の話し合いの有無による父母の校則見直しの意識は、表(10)に示すとおりである。この表よりわかるとおり、親子で校則問題について話し合っているところでは、校則見直しの意見が過半数以上を越える程に多く出ている。

校則問題について親子で話し合っている内容は、服装、身なりの問題を述べるのが多い。その意見を示すと次のとおりである。「学校から注意を受けているので親として髪型等について守るよう言っているが、なかなか守らないので困っている」(小学生6年をもつ親・事務)「髪型について、子供は長髪を希望しているが、親は現在の坊主頭でよいと思っている」(中学生をもつ親・PTAの役員・事務)「靴下の折りの幅等厳しすぎるということで子供と意見が一致している」(中学生をもつ親・PTA役員・事務)「服装の事では、子供と一致している。あまり細かい事までいわないでほしい」(中学生をもつ親・PTA役員・事務)「子供は髪型、スカート等についての校則にいやがっているが、親としては規則を守ってほしい」(中学生をもつ親・飲食業)「髪型を許してもいいのではないか」(中学生をもつ親・公務員)「親としては校則について現状でよいと思っているが、髪型について生徒会で問題になったことを議論した」(高校生をもつ親・事務)「親子の校則に対する意見は、一致している。髪と服については、特に厳しいのではないか」(中学生をもつ親・事務)「親として、子どもから学校での髪型や服装検査の内容を聞いているが、あまりにも細かいと思われる点を感じている」(中学生をもつ親・事務)「一応校則は守るべきであるということは親子の意見は一致しているが、つまらない細かなことでくどくど教師が注意することは問題である。」(中学生をもつ親・事務)「頭髪は子供の自由でよいと思っているが、学校では教師からたびたび厳しい注意を受けて、教師の指導が子供の心を荒廃させていることがよく理解できる。子供には勇気をさせと応援している。裁判の例等も教えてやっている。」(中学生をもつ親・公務員)「親としては現在の校則は、大いに見直すべきと思っているが、本人が中学校とはこういうものであるとあきらめている。」(中学生をもつ親・公務員)「親としては、校則は細かすぎるし、教師が目くじらたてて

表10 親子の校則問題の話し合いの有無による校則見直しの意識 %

	現状で よい	大いに見 直す	やや 見直す	わから ない	無回答	計
ある	40.3	20.8	34.9	1.3	2.7	100.0
なし	64.4	4.7	20.8	8.1	2.0	100.0

表11 子供に現在気をくばっていることの有無と校則見直しの意識 %

	現状で よい	大いに見 直す	やや 見直す	わから ない	無回答	計
ある	42.9	17.9	31.4	5.1	2.6	100.0
なし	61.7	6.8	24.1	5.3	2.3	100.0

子供に守らせるようにしている現状は問題と思っているが、子供はあるがままだに受け入れて疑問はもたないようである。親としては疑問をもち、現状をかえるようなエネルギーが子供に必要と思っている。」(高校生をもつ親・公務員)「中学生らしく子どもは反発を感じているようである。細かに決めている校則についての考え方は、親子とも同じである。」(中学生をもつ親・公務員)「親と一緒に外出時のとき、私服でいいのではないかと娘にすすめるが、娘は生活指導の先生に見つかる大変だということで、親のすすめを拒否する。」

髪型・服装について、子供が親に不満をのべることは一般的にみられることである。しかし、校則について親子の話し合いをしている家庭の事情は大きく異なる。親自身が現状の校則について色々と問題を感じているが、子供自身が学校の規則に厳しく拘束されていて、親が認めていることも強く拒否する子供もあらわれている。又、親として、少しは、現実の細かすぎる校則に問題を感じてほしいと思うものさえみられる。校則に対する親の見方は、一方的に、学校の規則を親が受け入れて、学校側からの子供の注意をそのまま受け入れて、親が子供に学校の注意を積極的に指導するものとは限らない。むしろ、子供自身の校則の反発に同感する親も少なくないのである。

(2) 制服問題に対する父母の意識

1. 学校での制服について

父母の制服問題に対する意識調査のうえで、制服が実際にどうなっているかが重要である。自分の子どもの学校で制服を定めて指導しているとした父母の回答は、92.3%であり、制服がないと回答した父母は3.5%、形式的に制服があるが、現実的に学校は強制していないと回答した父母は2.6%である。この結果から、この調査の対象の大多数の学校では、制服を定めて、学校が指導していることがわかる。

表(12)に示すとおり学校で制服を定めて指導することに多くの親は賛成の意見をもっているのが特徴的である。校則について全般的に見直しの意見をもつ親でも学校の制服については、賛成の意見を示しているのである。学校の制服について反対の意見をもっているのは約1割にすぎないのである。

制服賛成について、経済的理由をあげる父母が少なくない。「制服がない場合には洋服代にお金がかかりすぎるのではないか」「中学生や高校生はおしゃれに気を使うようになるので制服がないとファッションの流行を追う傾向が出てくるので制服があれば経済的である」「子どもに制服を強制する気はないが、しかし、制服があれば

表12 学校で制服を定めるとについての父母の賛否
%

	大いに賛成	やや賛成	反対	わからない	無回答	計
小学	52.2	27.5	20.3	0.0	0.0	100.0
中学	58.7	29.4	6.3	1.4	4.2	100.0
高校	71.6	20.0	7.4	1.1	0.0	100.0
計	61.0	26.2	9.9	1.0	1.9	100.0

経済的にたすかる。」「経済的に制服はよい。服装が華美にならずよい。しかし、洗いかえができず不衛生な面もある。」「中学生は、服装に関心を大いに示していく時期ですし、自己の抑制をきかない年頃だし、制服がなければ限りなくエスカレートしてしまうのではないか。制服がなければ経済的に不安である。」

学校の制服の存在に教育的な意味をみいだそうとする父母の意見は、次に示すとおりである。「おしゃれの好きな年頃だから自由にさせたいが、おしゃれの本質を教える意味でも制服は必要」「学校というのは団体生活の場であり、皆統一された制服を着用するのが望ましい」「子どもにとって、学校に制服があれば、学校と家庭との気分の切り替えになってよい。」「貧富の差を感じないからよい」「制服は、勉強のけじめがついてよい」「中学生は、流行にとびつきやすい年頃だし、自分の個性、意志で良し悪しの服装感が身につく年令ではないので制服でよい。」「制服については、賛成であるが、現在のような細かすぎるところまで決めているのは納得できない。」

ところで、制服に反対している父母は、数は少なかったが、明確にその理由をのべているのが特徴的である。その理由のいくつかを示せば次のとおりである。「制服はいつも監視されているようで囚人のようだ」「制服は画一的な管理教育である。」「子供の服装まで学校が拘束するのはおかしい」「服装は自己主張のあらわれ、制服は必要なし。」「制服は個性を尊重していないあらわれ。小学校での標準服は、汚してもかまわないというような自由にのびのびした服装ではない。」

以上のように制服に反対する父母の理由は、子どもの個性と自主性を重視し、管理教育としての視点から制服・標準服の強制を厳しく批判する。制服・標準服についての父母の反対意見は、小学生をもつ親に、約2割近くを占めている。この小学生をもつ父母では、色々と問題を感じるが制服があってもよいという回答の「やや賛成」派は、27.5%を占め、大いに賛成という全面的肯定は、52.2%と半数程であるが、高校生をもつ親になると「大いに賛成」と回答した親が71.6%と全体の4分の3近くの父母が現状の制服に積極的に賛成しているのである。高校生をもつ親の大いに賛成の理由で目立ったのが、経済的理由をあげているのが特徴的であった。

2. 帰宅後の校区外の制服着用の校則について

帰宅後の校区外の制服着用の校則について、表(13)に示すとおり、全体的に「大いに賛成」であると回答した父母は、38.7%と学校での制服に比較すると積極的な賛成の意見は大幅に少なくなってくる。とくに、中学生、高校生をもつ親において「大いに賛成」の意見が3分の1近くに減っており、小学生をもつ親は変化がなかったのに対象的である。小学生の場合は、「帰宅後校区外に外出するときに制服を定めている」と回答した父母は、17.4%とわずかであるが、中学校の場合、制服を定めていると回答した父母は、81.1%、高校の場合は64.2%となっている。つまり、小学校においては、現実的に帰宅後の校区外の制服着用の指導はあまり問題になっていないが、中学校、高校にとっては、学校側の生徒指導の大きな課題になっているのである。

中学校、高校において「帰宅後校区外に外出するときに制服を定めていない」と回答した父母は、

17名であったが、この校則について問題があると回答した父母は全くなく、帰宅後の制服着用を義務づけていないことを歓迎している。「帰宅後校区外で制服を着用することを校則で義務づけて指導している」と回答した父母は、61.6%と約6割であったが、この父母のうち、そのように校則を定めて指導していることに「大いに賛成」と答えたのは、35.8%と約3分の1の父母が積極的賛成である。また、強く「反対である」と答えた父母は、20.7%と約5分の1である。

帰宅後の校区外制服の着用を義務づける校則に大いに賛成する父母は、その理由を具体的に次のように述べる。「制服を着ていることで行動面で自覚をある程度もてる」「学生としての自覚と誇りを得られるようになる」「自分の行動に注意するようになる」「高校生は大いにおしゃれに興味があるので服装が派手になりがちのおそれがあるので」「高校生の場合、ファッションにとらわれや

すく、洋服代にお金がかかりやすい為」「制服を着ていると中学生としての規律を守れると思う」と答える。以上のように、帰宅後の制服着用を望む父母は、制服を身につけていることによって、自分の行動に自覚をもてるとか、学生としての規律を守ってくれるのではと期待している。また、制服でなければ服装が派手になり、ファッションにとらわれやすく、経済的にも負担を増すということの不安をもつのである。

帰宅後の校区外の制服着用の中で「やや賛成」と答えた父母は、その理由に、「ときには私服の選択も楽しみで与えていいのではないか」「親と同伴なら私服もいいのではないか」「帰宅後は私服で外出しているが不都合はない」「親と遊びに行くときは自由にさせたい」ということを述べる意見が多く出ており、積極的に帰宅後の制服着用を肯定する理由をあげていないのも特徴的である。

ところで、帰宅後の制服の着用について反対する父母たちは、その理由を積極的に述べており、

表13 帰宅後校区外の制服着用についての父母の賛否 %

	大いに賛成	やや賛成	反対	わからない	無回答	計
小学	53.6	15.9	20.3	4.3	5.8	100.0
中学	34.3	42.0	16.1	2.1	5.6	100.0
高校	33.7	38.9	17.9	6.3	3.2	100.0
計	38.7	34.8	17.9	3.8	4.8	100.0

表14 学校での帰宅後の制服着用の校則の有無状況 %

	学校では指導	学校では強制なし	学校では校則なし	無回答	計
小学	17.4	20.3	60.9	1.4	100.0
中学	81.1	11.9	5.6	1.4	100.0
高校	64.2	26.3	9.5	0.0	100.0
計	61.7	18.2	19.2	1.0	100.0

表15 帰宅後の制服着用を指導している学校での父母の賛否 %

	大いに	やや賛成	反対	不明・無回答	計
小学	25.0	25.0	50.0	0.0	100.0
中学	36.2	43.1	18.1	2.6	100.0
高校	36.1	36.1	19.7	7.2	100.0
計	35.8	39.4	20.7	4.1	100.0

反対者のうち78.2%と8割近くが何等かの理由を具体的にあげている。これは、大いに賛成した父母のうち理由を具体的に回答したのが39.7%と約4割と比較すると対象的である。帰宅後の制服着用の反対の意志をもつ親は、その理由を具体的に次のように述べる。

「おしゃれをする時間も必要」「高校生にもなればその場に合った分別はついているので私服でもよい」「むしろ、自分の行動に責任をもたせるためには制服にこだわる必要はない」「今まで他県に住んでいて私服でも問題はなかった」「帰宅後に何を着るのかは自由であるはず」「帰宅後は家庭の責任だから父母にまかせてほしい」「制服では子どものセンスが悪くなる」「学校は帰宅後まで干涉すべきでない」「私服によって、自分に似合う色と形を見つけてほしいし、その場に合った服を身につけられるようになってほしい」。帰宅後の制服着用を反対する父母たちは、子どもの自主性、個性を伸ばしてやりたいと考えている。おしゃれも必要であるとか、自分に似合う色と形の感覚を身につけてないということで、むしろ、私服による個性的な感覚の発達を期待しているのである。また、帰宅後の生活は、家庭の問題であり、学校の干涉すべきことでないという意見も多く出ている。

(3) 学校外生活の校則に対する父母の意識

1. 遊び場所・遊戯場のきまりについて

子供の学校において、遊び場所・遊戯場等の禁止の規則を作っていると答えた父母は、90.7%とほとんどの学校において、遊び場・遊戯場への禁止の校則を作っている。とくに、中学校においては、「学校では規則を作り守るように指導している」と答えた父母が95.8%にあがっている。遊戯場への禁止の校則について、「現在のきまりで適当」とする意見は、66.1%と約3分の2であり、「細かすぎる」と答えた父母は、24.3%と約4分の1近くになる。この規則について、「必要がない」と答えた父母は、3.5%で、ほとんどの父母が遊び場・遊戯場等への禁止の規則の必要性を肯定している。

中学生をもつ父母は、遊び場・遊戯場への禁止のきまりは、「こまかすぎる」という意見が30.8%と約3分の1近くを占めている。高校においては、「現在のきまりで適当」とする親が、76.8%と4分の3以上が現状のきまりに

肯定している。遊び場所・遊戯場のきまりは必要だが、現在の学校の規則はこまかすぎると回答した父母は、その理由を次のように述べる。

「子供自身色々経験していく中で、判断力を身につけさせてい

表16 遊戯場等の禁止のきまりについて

	現状で 適当	きまりが こまかい	きまり必要 でない	わからない 無回答	計
小学	63.8	18.8	5.8	11.5	100.0
中学	61.5	30.8	2.1	5.6	100.0
高校	76.8	16.8	4.2	2.1	100.0
計	66.1	24.3	3.5	6.0	100.0

きたいので、細かなきまりは必要なし」「根本的には遊び場所のきまりは必要でないが、一部の子供達を見ていると、ある程度の規制はやむえないのではないか」「中学生にもなれば善悪は自分で判断できるようになっていると思うし、家庭でも多少の定めがあるのではないか」「家庭の良識に もっとまかせるべきである」「禁止事項が多すぎる」「あまりにも何もかも禁止しすぎる」「ボーリング、スケート等スポーツ的要素を含んでいるものまで禁止なのはおかしい」「子供の自主性にまかせるべきである」「何でも禁止とするのはよくない」「高校生になれば喫茶店は保護者同伴でなくてもよいのではないか」「たまには子供達も息ぬきしたいと思っているので悪い遊びはいけなが少しぐらいはいいのではないか」「せめて卓球、ボーリング等は子供達だけの行動を認めてほしい」「どこでも制服でないと遊びにもつれていけないし、少しの自由は与えてあげたいと親として思う」「人に迷惑をかけないで自分で責任をもたせればいいのではないか」「現実の地域の状況を考えると遊び場所のきまりも仕方がないと思うが、余りにも禁止が多すぎる」「近くの川で川遊びもできない。危険を自分の体で体験できなくなっている」「中学生は遊びざかり。自分が子供のころしていたことが、禁止されているのはおかしい。」

以上のように、遊び場所・遊戯場のきまりは必要だが、現在のきまりは、こまかすぎるという父母の意見は、現在のきまりに極めて否定的な見方が強く出ている。多くの父母は、できることなら遊び場所・遊戯場のきまりは必要でないと考えている。子供の遊びは、自由に、子供自身の自主性にまかせるべきであり、本来的にきまりによって拘束するものでないとする意見が多い。また、学校外の遊びは、家庭の良識にまかせてもらいたいという指摘もある。全体的には、禁止事項が多すぎて子供の遊びの世界が自由でないとしている。しかし、ゲームセンター等地域の現状が必ずしも子供にとってよい環境とはいえず、すべて遊び場所のきまりをなくすことは親にとって大きな不安もあることも事実である。

ところで、学校によつての遊び場所・遊戯場のきまりが積極的に必要であるという父母の意見は、次に示すとおりである。「不純遊行を防ぐためぜひとも必要である」「ゲームセンターなど金銭面から考えて高校生の入る場所でないので、禁止は当然である」「高校段階は、色々に興味ある年頃であるし、悪いことに感化されやすい時期でもあるので、厳しいくらいが適当」「環境に左右されやすいので、健全育成のため遊び場所のきまりは必要」「非行に走り易い時期の爲、きまりがある事が望ましい」「最近家は一步出るといろいろなものがあり、親の知らない店や遊戯場、施設が多すぎる爲、きまりは必要」「ゲームという大敵があるので高校まではきまりがあつた方がよい」「中学生なので遊戯場にいかなくてよい」「子どもにとっても望ましくない所へは小さいときから行かせたくないで学校での禁止のきまりは必要」「進学校であるため遊戯場のきまりは妥当である」「社会人になったらどこでも自由に自分の意志で出入りできるのであるから、ある期間は犠牲の生活も大切ではないか」「無職少年のたまり場になっている所も多いので厳しい方がよい」「まだ精神的に強くないので、色々な誘惑に負けやすいのできまりは必要」「高校には勉強しに行っているの、勉強がおろそかになるといけないので現在のきまりは適当」

以上のように、学校による遊び場所・遊戯場のきまりを積極的に求める父母は、不純遊行や非行に走るのではないかという強い危惧意識をもっているのが特徴である。これは、中学生、高校生という不安定な思春期の年令時期と地域の環境が子供の成長にとって問題が多いとする親の不安から、学校に遊び場所・遊戯場のきまりを求めているのである。地域の環境問題では、ゲームセンターの存在に強い危惧をもつ親が少なくない。

2. 学校での生活点検指導について

学校において、生活点検等の校外生活の躰、生活習慣の指導を行なっているかという回答で、「きまりを作って指導している」とした父母は、小学校31.9%、中学校67.2%、高校62.1%と中学校、高校では約3分の2の親が学校で生活点検等のきまりを作っているとしている。小学校の場合は、きまりはないが生活点検等の指導を行なっていると答えた親が46.4%であり、約半数近くがきまりをもたずに実際に生活点検等の指導を行なっているとしている。学校において、生活点検等の校外生活の躰、生活習慣の指導をしていないと回答した親は、全体でわずか2.6%であり、多くの親が学校での生活点検等の指導をしているとする。

学校の生活点検等の指導について、父母は、どのように思っているのだろうかという、「きまりを作って指導すべきである」と回答した親は29.1%、「きまりがなくとも教師は生活点検等の指導すべき」とした回答が36.1%であり、きまりがなくとも指導すべきという親の意見が、きまりを作って指導すべきとした親よりも数が多く出ている。つまり、きまりを作って指導している学校が全体で57.2%あったが、親の意識において、そのとおり考える意見は、その約半数で29.1%である。むしろ、多くの親は「きまりを作らなくて、実質的に生活点検等の指導をしてもらいたい」と望んでいるのである。とくに、小学生をもつ親の場合は、42.0%の父母がきまりがなくとも指導すべきと回答しているのである。

表17 帰宅後の生活点検等のきまりと指導の実施状況 %

	きまりを 作成指導	きまりなし 指導	指導しない	無回答	計
小学	31.9	46.4	7.2	14.5	100.0
中学	67.2	28.0	0.7	4.2	100.0
高校	62.1	29.5	2.1	6.3	100.0
計	57.2	32.9	2.6	7.3	100.0

表18 学校での生活点検等指導の父母の賛否 %

	きまり 必要	きまりなく 点検指導	干渉すべき でない	わから ない	無回答	計
小学	18.8	42.0	10.1	15.9	13.0	100.0
中学	32.9	35.0	10.5	7.7	14.0	100.0
高校	30.5	31.6	16.8	10.5	10.5	100.0
計	29.1	36.1	12.1	10.2	12.5	100.0

この生活点検等の指導について、「わからない」「無回答」の父母も高く、両方合わせると22.7%にもあがり、この問題について学校が指導すべきであるかどうか態度保留している親も他の質問に比べて高く出ているのも特徴的である。

家庭のことなので、生活点検等の指導をすべきでないと回答した親は、全体で12.1%である。中でも高校の場合、16.8%の親が家庭のことなので干渉すべきではないという意見をもつ。高校生段階になると生活点検等の学校の指導に疑問をもつ親が増えているのである。

家庭等の校外生活の躰・生活習慣に干渉すべきでないと回答した父母の意見は次に示すとおりである。「それぞれの家庭には独自の個性があるので、そのことまでふみこまないでほしい」「学校を離れた子供の生活は、家庭の責任である」「一般の家庭には父母がおり、教師がそこまで入りこむ必要はない」「家庭のことは父母の躰の責任」「家庭にまで学校側のきまりをおしつけるべきではない」以上のように、干渉すべきではないとした父母は、家庭にはそれぞれ個性があり、私的生活領域であり、学校の生活点検等指導が入りこむものではないとしている。

きまりがなくとも教師は、生活点検等の指導すべきとした親は、教師の学校外での生活指導を求めていることが父母の意見の中から読みとることができる。「家庭でも生活の指導はするが、なんといっても子供は先生の言いつけは守るので」「親が言うだけでなく、教師の注意も加われば大きな力になる」「先生の言う事の方が親よりききめがあるから」「家庭で躰はしなければいけないが先生方も人としての生活習慣には干渉してほしい」「学校生活では親以上に子供とのつきあい時間が多いので親になったつもりで子供の生活に干渉してほしい」「全ての家庭がその機能を果たしているとはいえない現状では教師も大人として指導する責任がある」。これらの意見は、生活点検等の指導に教師に期待する声が強く出されている。教師への期待は、親の指導よりも教師の方が効果があるということからである。つまり、親よりも教師のいいつけの方が子供にききめがあるということである。親としての自信のなさが、かえって教師への生活点検等の期待になってあらわれている。

さらに、親として本来すべきであることだが教師の協力によって生活点検等の指導も求める意見も少なくない。「生活点検等の指導は本来親のすべき事と思うが、高校生になると親、教師お互いに子供の姿に目が届かないところもあるので両者とも考えるべきである」「教師の指導は必要だが、家庭も責任をもつべき」「学校外での躰は家庭でしっかりすべきと思うがきまりでなく教師の助言があれば親の気がつかない点にも手が届くようになる」「生活点検のきまりはいらないが生活習慣化のための学校の指導は必要」「学校だけで一生懸命指導するのではなく、もっと家庭でも躰、親としての責任をもってほしい」という回答である。

また、きまりがなくとも教師は指導すべきであるとした親の中で、学校は、学習面の指導に偏っており、生活点検等校外生活の指導にもっと力をいれるべきであるという父母の意見もある。「学校は、学習面のみを重視し、基本的生活態度としての躰が甘くおろそかになっている」「勉強だけで教えるのではなく、学校はいい意味での子供の生活にとって権威があってもよい」と述べる。

学校はきまりをつくって生活点検等の校外指導を行なうべきであるとした父母の理由は次に示すとおりである。「今の子供はきまりがなければ生活を自分で判断できない状況になっている」「きまりがあるからこそ、子供は判断できるのである」「ある程度のきまりがないと教師は、指導ができ

ないのでは」「教師と親とが一体となってきまりによって指導しなければ今の子供はよくならない」「学校内だけの指導だけでなく校外での生活に教師は大いに目をむけるべきである」と教師の校外生活での生活点検等の指導に積極的に親は期待するのである。

表19 生徒指導についての父母の意識

					%
	大変よい	だいたいよい	わからない無回答	問題ある	計
小学	23.2	40.6	30.4	5.8	100.0
中学	23.8	45.5	16.1	14.7	100.0
高校	26.3	46.3	16.8	10.6	100.0
計	24.6	44.1	19.8	11.5	100.0

学校の生徒指導について、「大変よくしてくれる」と回答した父母は、全体で24.6%、「だいたいよくしてくれる」44.1%、「問題がある」11.5%、「わからない・無回答」19.8%となっており、3分の2の親が生徒指導についてよくしてくれると回答しているのである。ところで、生徒指導に問題を感じている父母は、中学校において最も高く、中学校では、生徒指導に問題を感じている親が14.7%と高く出ている。

生徒指導については、多くの親が「よくしてくれる」と思っている。「先生方がみんな一生懸命やってくれている」「子供は不満ながら守っているし、それが良い方に身についたら良い指導だと思う」「学校全体としては非常に厳しい印象をもつが、個々の教師は生徒の個性に応じたよい指導をしてきている」「先生方も大変よくしてくれているが、自分の時間がもてなくて大変のようだ」とよくしてくれていることについての意見を親は述べている。しかし、教師が一生懸命になってよくしてくれることはいいことであるが、教師自身が自分の自由な時間をもてないことはどうであるかという疑問をもつ父母もいる。

教師の生徒指導について問題を訴える父母は、その内容を具体的に次のように述べる。「生徒指導において何もかも高校進学のことをもちだすのはおかしい」「連帯責任で悪いこともしていないのに頭をたたく教師がいる」「どうでもいいようなことに教師の神経がいき、肝心の子供の気持ちが無視されている」「体罰を加える教師がいる。体罰では人は救えない」「多様な生徒をかかえて教師も大変だと思うが、一部の特殊な生徒にのみ生徒指導の焦点があてられている」「体罰が必要かどうかわからないが、教師の感情で生徒指導されることが多い」「教師の指導の本意が子供に伝わっていないことが多い。子供の心の発達、環境を冷静に考慮した指導をしてほしい」「教師と子供が相性が悪かった場合など救済の手だてがないので、やられ損という感じがする」というように教師の生徒指導に対して厳しく意見をのべる父母も少なくない。

ところで、教師の生徒指導が子供の人権を犯していることがあることも直視しなければならない。ここにでてきた父母の意見の中からもそれをみることができる。高校進学の内申のおどしによって生徒指導している教師、何も問題を起こしていない生徒に連帯責任として体罰を加える教師、教師

の感情で体罰を加える教師等父母の生徒指導に対する意見の中でもこのように具体的に問題があがっているのである。しかし、多くの親は、学校に対して、生徒指導をよくしてくれると思っているのが実際であり、学校外での生活指導に対する教師の役割期待も大きいのが現実である。

(4) 校則問題の調査に対する学生の意識

校則問題について、親と面接調査した学生はどのような感想をもったのであろうか。学生は中学校・高校と校則のなかで生活して、将来教師を希望しているものたちである。学生の校則問題の感想の類型として、校則の賛成の親の意見に同調して賛成している学生や、自分自身積極的に校則の教育的意味をみいだして賛成している学生、自分の中学時代・高校時代を思い出しながら現在の校則に反対している学生、子供の教育の視点から現在の校則を反対している学生、調査をして親が現在の校則に強く反対していることからその意見に同調している学生、大学に入ってから友人と校則問題を話し合うなかで現在の校則に疑問をもった学生、校則問題では自分の意見がまともらず態度保留の学生等校則問題についての学生の意見は様々である。

現在の校則について賛成した学生の意見も単純でない。現代において集団生活の意義や非行問題から校則に積極的な教育的側面をみいだそうとする考え、校則があった方が例えば制服など着ていくものを自分で考えなくてすむから生活が楽であるという見方、最初は厳しくとも慣ればなんでもないので慣れの教育を強調する意見等学生の校則賛成の理由も多様である。

学生のそれらの意見を具体的にあげれば次に示すとおりである。「調査対象者の親は、学校にはきまりは必要であると考え、現在の校則に関しても肯定的に受けとめている。この親たちの気持ちもわかる。親は子供の将来を大学に行かせて将来性のある職業についてほしいと願っている。学歴社会のなかでは成績のいい子供がよい学校に入れる。しかし、成績がいいだけでは、内申書があり、いい高校は入れてくれない。校則を守り問題をおこさないことが必要である」「規則がないとやはり学校は集団生活のところであるので乱れては困るのである。校則が厳しくなるのは、規則を守らない生徒がいるからである。」「制服についてはあるべきものであり、調査においても批判的な意見はなかった。わたしもすでに定着しているものであるし、現状でよいと思っている。鹿児島は県外からきたものには異様というが、本来的に校則として、私生活に干渉しないほうがよいとおもわない。」「校則を守るということは一見かなり厳しいように思えるが、一年、二年たつうちに慣れ、なんでもないようになる。校則が厳しいということは必要である。」「最近の傾向として、生徒が親を味方につけ、学校側の指導に耳を貸さない部分がある。体罰においても、時と場合によっては必要であるにもかかわらず、すぐにPTAで問題になってしまう。これは現代の親の過保護からくるものであろうか。昔は学校での指導は先生に安心してまかせていたものだったというのに。」「制服は経済的でもあるし、学生という気持ちのひきしめができるので」「制服に関していうと大学に入学してから毎日着ていくのを考えたら制服があったほうがよいと思う。制服が決まっていたら経済

的であり、オールマイティで簡単であろう。」「大学生である今、校則についての考えといえば、規律を正すためにある校則を守ってしっかりした生活態度を身につけてほしい。中学・高校は長い人生のわずかの期間なので学生らしくしてほしい。」

現在の校則問題についての考えに態度を保留している学生は、「私が調べた一人の親は外出時の服装ぐらい子供の自主性にまかせたいということで、もう一人の親はまだ思春期であり未発達の段階であるから親が普段の服装に気をつけるべきであるという。前の親は子供の自主性に任せるべきということで、後の親は子供にまだ任せきれないというが、どの程度まで子供の自主性に任せるべきかわたしにはとても難しい問題である。」「制服に関しての理由として学生らしさを維持するということをあげるが、私として賛成とも反対ともいえない。私服だから学生らしくないということに疑問があるが、しかし、非行の予防といった面では効果があるし、いちがいに悪いといえない」とのべる。

ところで、教師の家庭にいて校則賛成の意見を調査したが学生の感想をあげるとつぎに示すとおり。「制服は、父母の立場として経済的に助かり、大いに賛成である。制服があれば細かい指導がいらなくなるように思われるが、しかし、制服の規定があるとそれを守らせるための指導がかえって厳しくなるものだ」と教師は述べるが、学生はこの意見にたいして「制服を生徒管理の視点からしかみていない。父母として、教師としてどちらの立場も経済的、指導しやすいと自分の立場しか考えていない。子供の個性、人権ということからみていない。」「校則にはかなりの絶対的信頼観をもっている。頭からつまさきまでびっしり決められていることに別に不満を感じた様子でなく、むしろ、校則を子供にきちんと守らせることを望んでいる。子供は精神的に不安定であるため校則を厳しくしてもらいたいというが、この意見には学生として賛成しがたい。校則を取り締まるために夢中になっている教師をみるとどこかずれているように思える。」

校則についての父母の調査の感想でもっとも多かったのは自己の中学校・高校時代の体験から現在の校則に疑問をもっていることである。これには、具体的に教師に「髪型がおかしいといわれ、はさみで友人が髪をきられたこと」「毎日の服装検査等」を綴っていることが多い。

「私も中学、高校の頃は、校則に悩まされた。特に中学校の頃は、今から思うと異常な程、厳しい生活指導を受けた。それは徹底したもので、毎朝生活指導の先生が数人たって校章のつけ方からスカートの高さ、くつ下のみつおりの幅、髪の高さ、カバンの中身まで入念に調べられた。…学校は荒れていたもので、指導をする時も教師は感情的になり、生徒達を本当に憎んでいるのではないかと思う時もあった。」このように、中学校時代を思い出して述べる学生も少なくなかった。そして、これらの学生達は、「現在でも厳しい生活指導が続いているようで、もっと自由に一人一人のことを尊重してあげられるようなたのしい学校ができるといい」と答える。

調査をしたある学生は、先入観として、父母はもっと校則に厳しい方がよいと思っていたが実際に話を聞いてみると父母も現在の校則は厳しいのではないかと校則見直し意見を聞いたときは驚いたとしている。校則見直しの意見を積極的に聞いてきた学生達は、校則について批判的な親がい

ること自体が驚きであったと思う学生も少なくなかった。彼らの中学校、高校時代を振り返ってみるとそのような父母に接したことがなかったようである。「父母はもっと校則は厳しくした方がよいと思って調査に参加したが、現在の学校の校則は父母から見ても厳しいものであるのに驚いた。このことは、やはり、学校における問題だと思う。親からみても厳しいものなんだから校則の中で生活している中・高校生にとっていかに厳しいものか。」学生達は、調査した父母の意見に大きく左右されて自己の感想を書いていたものが多いのも特徴であったのである。

ま と め

本稿は、校則問題に対する父母の意識調査を学生を通して面接調査したものの結果分析であった。本調査は、統計的に鹿児島県全般の父母の校則問題に対する一般的な意識調査でもない。学生の生活する身近な父母を対象にして面接調査させたものである。

父母の職業別な階層によって校則についての意識の違いがあることも明確になった。とくに、専門的な職業層に属する父母は、現状の校則についてきわめて批判的であることもわかった。これとは対比的に肉体労働者、農業従事者、自営業者の場合は、現状の校則に対して肯定的な傾向が強くあらわれていたのである。

現状の校則について、見直し意見をのべる父母は、その理由を具体的に述べているのも特徴的であった。しかし、校則について現状肯定的な父母はその理由をはっきり述べないものが多かったのである。この調査の学生の感想において、父母の中に校則について批判的な意見をもっているものがあること自体に驚きをもったのも調査を通じての学生の現実認識の意識変化として重要なことであった。

教師を職業としている家庭が、親の立場から校則をどのようにみているのかも本調査の分析での特徴であった。親の立場からみるならば、現状の校則を見直すべきとした教師の意見が強かったのである。その見直しの意見も教師の家庭の親は具体的に問題点を述べていたのである。現状の校則を肯定した教師の家庭の親は、子どもの進学に強い関心を示し、有名校の志向も強くあらわしていたのである。

ところで、学校での制服着用については、多くの父母が賛成していたが、その理由として、教育的なことよりも経済的なことをあげていた親が少なくなかった。また、帰宅後の校区外の外出の制服着用になると批判的になる父母も大きく増大していくのであった。むしろ、私服による子供達の自主性、自由を望む親が多くなっていく。

遊び場・遊戯場の学校のきまりについては、現実的にゲームセンター等の地域の子供の成長にとっての環境悪化の中で、その必要性をしかたなく思う親が多かったが、中学校におけるこまかすぎるきまりについては3分の1程の親が批判的な意見を述べていたのである。ここでも批判的な意見の父母は、その理由を積極的に述べるが、現状でよしとする父母は、地域の環境のことから不安を述べることが多く、具体的に肯定する理由を積極的に述べていなかった。

学校の生活点検等の校外での指導については、中学校、高校においては、きまりを作って指導を望む父母が多く出ていたが、小学校においては、きまりを作って指導するよりも「きまりがなくとも指導すべき」とする父母の意見が強くあらわれていたのである。

以上のように校則問題に対しての父母の意識状況の特徴が明きらかになったが、さらに、具体的にそれぞれの学校ごとの校則の現実に対応しての父母の意識調査もきめ細かに具体的な学校に即して分析していくことが求められている。

(1989年10月16日)